

小説

奨励賞

【自由作品】

金魚

加賀谷 章 太

「本多海^{ほんだかい}です、宜しくお願いします」

受付で自分の名前と初出社である事を告げると直ぐに奥の応接室に案内された。事務所を一瞥しながら進むと、まだ始業三十分前だが既に出社している社員が多い。こぢんまりとしているが3S（整理・整頓・清掃）が行き届いている。社会人十五年目で初めての出向。同期と比べても遅い方だ。だから余計にこれから業務への期待というより、新しい人間関係の中でしつかり仕事ができるのか、不安の方が大きく、緊張しているのが自分でもわかった。

応接室には落ち着いた木目調のローテーブルを挟んでソファが配置されていた。奥の棚には数々のトロフィーや賞状が並べられている。浅倉工業野球部の栄光の歴史だ。石川県社会人野球の強

豪なのだ。

海は入口側の三人掛けのソファに腰を掛けて、緊張をほぐすように短く深呼吸をした。

暫くするとドアが開いた。

「どうも。浅倉工業の社長をしています浅倉修です。そしてこちらが会長の浅倉勝、父です」修社長の話すスピードは速かった。頭の回転も速いのだろう。間髪おかず握手の手が差し出される。そういえば今まで初対面で握手をする習慣がなかったな、あまり関係のない事を思った。

「宜しく頼みます」対照的に、勝会長は落ち着いた声で挨拶してくれた。小柄だががっしりとした体を引き寄せながら、こちらは両手で包み込むような握手だった。長い間現場に出ていた事が

わかる分厚い手だ。髪型は丁寧なパンチパーマ。温和な笑顔だが、その目にはこちらの面構えを見定めようとする静かな迫力があつた。

「東洋製作所から来ました本多です。本日から宜しく願います」

「三年間の期限付きだけど、うちでしっかりやって欲しい。東洋製作所さんとの大きなプロジェクトもあるし本当に期待しているよ」

修社長は三つ程歳上だろうか。四十代前半、細身で笑顔が爽やかだ。髪型は流行りのツーブロックのベリーショート。前向きで明るいオーラを感じる。

その後、海は東洋製作所での経歴や生産技術での業務経験を手短かに紹介して挨拶を終えた。

案内された自分のデスクに座って一息つく、自然と出向前に手倉さんから聞いた話を思い出していた。手倉さんは東洋製作所の上司だ。浅倉工業に出向が決まった時、奥さんの実家が切盛りしている焼き肉「盛りちゃん」に誘ってくれたのだった。

「実は勝会長とは同期だ。サプライヤの社長のご子息という事で、新人社員の時から三年間、委託研修生としてうちで働いていてね。一緒に厚板の溶接をしていたよ。昔は一緒にこの焼肉をつまんだものさ」

手倉さんは看板メニューのヒネ鳥を鉄板の上で転がしながら焼いている。

「あいつは浅倉工業の二代目。社長になってからも、時々現場仕事をしていたよ。堅実なイイ男だね。だからってわけじゃないが経営もしっかり。あそこの売りは品質と納期遵守だ。毎年のようにサプライヤ品質表彰を受賞しているのだから、たいしたもんだ」

「手倉さん、今でも勝会長と付き合いがあるんですか？」

「ああ、そんな縁で浅倉工業の人達は今でもよく盛りちゃんを使ってくれているんだぜ」

ヒネ鳥が濃いきつね色に焼きあがつた。手倉さんはいつも焼いてくれる。でも自分は殆ど食べないで吞むだけだ。海はゆっくりと、だがどんどん口に運んでいく。そうしないと手倉さんはお前が食べないからだぞ……とでも言わんばかりに焼きあがつた肉を積んでいくからだ。それに咀嚼していくほどに味わいが増していく盛りちゃんの固めのヒネ鳥が海は大好きだった。

「修ちゃんはい三代目。アメリカに留学してから大手の総合商社に入った。同期の中で最速で昇進して課長になったって、喜んでいたら。二年前に浅倉工業に戻って、色々新事業や新技術の研究なんかを始めている。そりゃあ新しいことは難しいからちよつと焦っている所もある様だが、修ちゃんもまっすぐな性格のイイ男さ」

手倉さんは焼酎のコップを空にすると、自分でお店のカウンターに入って次のお酒を取り出してきた。まばらだが他のお客さんも入りだして、カウンターの右義母さんが忙しそうにしていたからだ。

「東洋製作所からの人の受け入れは浅倉工業では初めてだ。勿論、ウチの工場再編とその後の大物部品の量産受注を狙っている。だから海、俺がお前を選んだ。うちの生産現場を一番分かっているし、お前はお前で仕事大好き、ワーカホリック気味だからな」

「はい」 苦笑いで相槌を打った。

「修ちゃんも色々新しい事を始めようとして浅倉工業の中で苦勞もしていると聞いている。お前の受け入れだって、新しい試みの一つさ。だから海、浅倉工業の力になって、お前もまた一回り大きくなって帰って来い。帰ってきたらうちの課長の席を用意

しておくからよ。期待しているぞ」

盛ちゃんの入り口の引き戸がまた開いた。今度は三人組のお客さんが入って来た。作業服だから仕事帰りだろうか、常連さんのようだ。盛ちゃんの賑やかさが少しづつ増していく。店内には電灯の灯りに浮かび上がる焼き肉の煙がゆつくりとたゆたっていた。

パソコンや周辺機器のセッティングをしようとコンセントの場所を探していると隣の席から声を掛けられた。

「コンセントタップはデスクの裏にマグネットで貼り付けてあるつす。自分、板垣昌樹って言います。宜しくお願いします。本多さんからよく仕事を教わるように、社長からも言われています」

「ありがとう」海はデスクに潜り込むとコンセントを見つける事ができた。

「体が大きいね。何か運動していたの？」

「ずっと野球つす。今も会社の野球部でやっています」

「いいね。何番？」

「一応、四番です」板垣は少しはにかんだようにこたえた。二十代中頃だろうか、歳の割には落ち着いた雰囲気だが笑顔になると若者らしさが垣間見えた。

「東洋製作所が三か月後に入札を開く大物組立ユニットへの見積り準備を進めるように、修社長から言われている。まずは色々浅倉工業の事を教えて欲しい」

「はい。うちは板金・加工屋なので実は組立があまりわかりません。午後から現場を案内します。早速ですが、一度見てもらった方が早いと思います」

「三か月しかないから根詰めて仕事しないといけないな。宜しく海は自分から手を差し出した。今まで握手の習慣なんてなかったのに、早くも浅倉工業のやり方に染まって来たのだろうか。そ

う思うと自分でも少し可笑しかった。

その週の金曜日には板垣が盛ちゃんで歓迎会を開いてくれた。「製造部長の高山さんと経理の竹中さんです。二人とも野球部で、高山さんは監督、竹中さんはマネージャーです」

「海君、宜しく。あと、竹中は板垣の彼女さんでもあるんだよ。紹介が抜けていたな、昌樹」高山さんは日本人離れした濃い顔立ちで口ひげを豊かに蓄えている。何だか良く似合っている。

「そこをキチンと紹介しなさいよね」竹中は板垣より一つ歳上。姉さん肌のような。板垣はまた少しはにかんだ笑顔をみせた。

あと三か月で東洋製作所に見積りを提出しなければならぬ。飲み会の場だったが、海は時間が惜しいような気がして、現場見学の時になったポイントを次々と高山さんに聞いていった。

高山さんは本当に浅倉工業の現場をよく知っていた。勝会長の幼馴染みで、修社長が来るまでは副社長だったそう。修社長が入ってきたのをきつかけに、現場に戻って、今は後継者を育てているのだ。

しばらく高山さんの話に聞き入っていると若者二人がお座敷に上がって来た。板垣の同期で、二人は同じ高校の野球部から浅倉工業の野球部に入ったという。高身長で緩いパーマをあてているピッチャーの冴木と、坊主頭でキャッチャーの赤尾だ。自然と盛ちゃんで合流したようだ。本当にみんな盛ちゃんを馴染みの店にしている。

「普通、高卒はみんな現場配属なんですけど、昌樹は事務所で。頭が良いんですよ。板垣のこと宜しくお願いしますね」

冴木と赤尾は海のことを知っていたようだった。人懐こい距離感で、初対面だと感じさせない。

「高山さん、日本窓ガラスの左投げのピッチャー、えぐい球投げますね。ビデオ見ましたよ」

赤尾は浅倉工業の次の対戦相手の話を始めた。浅倉工業野球部は来週末に石川県リーグの決勝戦を控えているのだ。

「おいや。あれは去年の大聖寺高専のエースや。坂口リフォームの倅だな。内角攻めがたまに甘い」すかさず高山が答える。

「日本窓ガラスはまた活きの良い子を採用しましたね。去年は羽咋工業のスラッガーを採用していましたし」竹中も会話に加わる。

「あれは独立リーグから声が掛かっていたって話だ。今年も厄介だな」高山さんは石川県の野球事情なら全て知っていそうな勢いだ。

「大した事ないですよ。去年俺から三タコですもん」冴木が続く。

「四打席目でホームラン打たれたけどな」赤尾が突っ込む。

海の歓迎会というより、来週の決勝に向けた決起会のようになってきた。

「決勝に勝てたら次は北信越リーグ。長野で温泉に入りたい、ちゃんと勝つてよね」竹中は早くも翌年に思いをはせ始めた。

みんな酔いが回ってきたようだ。

「自分……、決勝で勝ったら竹中さんにプロポーズします」突然の板垣の宣言にみんなで驚いた。

過ぎやすい秋が終わろうとしていた。少しずつ雨の日が増え、冬が顔をのぞかせる。がっぷり四つに組んでいた秋と冬だったが、冬が秋を土俵際に寄り切り始めたのだ。

だが、そんな季節の変わり目に気を留める暇が無いほど海と板垣の業務は多忙を極めていた。大型案件の見積提出に向けて、ほぼ新規で浅倉工業の生産・物流導線を作り上げなければならなかったからだ。既存業務との重複を回避しながら最適な生産体制を構築するのだ。何度もやり直した。同時にクレーン・工具・治

具の準備、帳票・部品表の整備、倉庫・人員計画など、全て自分達でやらなければならなかった。これらを漏れなくコスト計算して投資計画を練り上げていく。やらなければならぬ事に終わりが無かった。

東洋製作所は大企業だったので、今までは自部門の責任範囲の中で設備計画を担うだけだった。だが、浅倉工業では全てを任されている。毎日、日付が変わる頃に帰宅した。ただそれでも海は充実感を感じていた。

板垣は時に早く帰ったような素振りを見せるが、元来根性があるのだろう。文句を言わずに海の仕事のリズムについてくる。

「あと一か月か」海はため息を吐くように独り言を呟っていた。無事、見積提出できるのか。大袈裟ではなく一日の時間の殆どを仕事に捧げているが、それでも不安だった。

自販機で買ったペプシ缶のプルトップを引いて、椅子に深く腰掛けた。強炭酸を喉に流し込むと、深夜でもひと時だけ疲労を忘れる事ができた。

一か月前、浅倉工業野球部は日本窓ガラスとの決勝戦に敗北した。警戒していた相手エースピッチャーに、板垣と赤尾のヒット二本に抑えられてしまったのだ。だから板垣はまだプロポーズを果たせていない。それでも、その翌週には竹中と同棲を始めたように、少しずつ結婚に向けて歩みを進めている。

師走に入ると、修社長のスケジュールは東洋製作所の主要職との会食で埋まっていた。日頃の付き合い合いとコロナ禍で数年来行われてこなかった忘年会を一気に兼ねているようだ。それでも修社長は会食が終わった後、必ず浅倉工業に戻って仕事をすることだった。その折に、日々の業務進捗を報告することができたので海は助かっていた。

この日も修社長は会食を終えて深夜に事務所に戻って来た。但し、いつになく厳しい表情をしている。事務所には修社長と板垣と三人だけだった。

「本多君、東洋製作所は組立ユニットの移管時期を早めたいよ。うだ。もともと来年八月のお盆休みに我々が設備を導入して、十月から組立ユニットの納品開始だったな。三か月前倒しで七月からになる」

「どうしてまた……。かなり厳しいですね」

「君の方がよくわかるだろう。東洋製作所のトップが来年四月で入れ替わる。着任早々に変化を起こしたという、分かり易い成果が欲しいそうだ」

「そんなこと言われても、修社長。これ下手したらうちでキチンと設備が立ち上がる十月までの間、マニュアル生産ですよ。仮にそうなれば現場は毎日、三時間レベルの遅延おそさんです。もっと酷いかもしれません。大変な事です」

大企業の都合でそれだけのサプライヤと従業員、ひいてはその家族が多くの事を犠牲にするのだろうか。想像しただけで大変なものだった。高山さんや冴木、赤尾の顔を思い浮かべた。海はサプライヤに身を置く立場になって初めて下請けの厳しさを実感した。

「分かっている。難しい判断だが、うちは受ける。苦しいのは最初の数か月だ。追加で従業員も雇用する。品質だけではない。納期もサービスだ。ここで競合社に差をつける」

こうして、年末の入札で確かに浅倉工業が組立ユニットの量産オーダーの受注を勝ち取った。競合社は繰り上げ納期についていく事ができないと判断し、見積を辞退したのだった。

「海、お前本当にできるのか。うちでは今、浅倉工業の評判がうなぎ上りだが……」その日の晩、手倉さんが心配して電話を

くれた。

「ここからは厳しいぞ。みんながギリギリになる。そんな中で浅倉工業を引っ張っていかけるかが鍵になる。海、技術力じゃない。これからは人間力が試されるようになる。正念場は続くだろう」手倉さんのアドバイスはいつだって厳しいがどこか温かい。それでいて的確だ。

海は年明けからの激務と浅倉工業の来るべき厳しい夏を想像して、不安な気持ちを拭いきれなかった。

手倉さんの電話を切った後、ふと、板垣の事が気になった。ここ三か月ほど野球の練習も、竹中との時間も満足に取れていないだろう。今日は早く帰るように、と伝えると、板垣もやはり心配そうな表情をしていた。

「大丈夫。全部うまくいく。所詮仕事だ。たとえダメでも殺されることまでは無い」海は自分に言い聞かせるように声を掛けた。年末までの仕事漬けの日々が嘘のように静かな正月だった。コロナ禍もロシアのウクライナ侵攻も、北朝鮮のミサイル発射も、全て違う世界の出来事かのような穏やかさだった。毎日ネットを通じて流れてくるニュースは自分が生きている世界とは命の重さがありにも違いすぎて、理解が追いつかなかった。

年が明けてあつと言う間に二か月が過ぎた。しかし、新規採用はうまく進まなかった。求人に対して応募自体が殆ど無いのだ。地方に工場を構える製造業、それもサプライヤの現実には厳しい。仕事も厳しい肉体労働で、誰にでも勤まる仕事ではないのだ。

海と板垣は設備導入を少しでも前倒しする交渉を粘り強く続けた。幾つかの設備はゴールデンウィークでの据え付けができるように見込みがたつたが、やはりメイン設備の前倒しは難しかった。時間の経過とともに浅倉工業製造部門のトップである高山さん

も害虫を嘔み潰したような表情になっていた。はじめから足りていない人員をどう配置するのか、新しい仕事に適正はあるのか、この難所に頭を悩ませているのだ。このままだとこれだけの仕事が残業対応になるのだろうか。果たしてそれで利益が出せるのか。それ以前に、連続の長時間残業による疲労の中で、従業員の安全を確保できるのか、心配は尽きなかった。

二月末、長かった冬がようやく終わる頃になって、ドカ雪が降った。一日中、空が低く、暗かった。浅倉工業の工場建屋に雪が分厚く、静かに積み上がった。不気味に輝く銀色の雪塊は会社全体にのしかかっている不安そのものに見えた。

海と板垣は新しい組立ユニットを三台分、^{ためしぐみ}試組する事にした。本格的な量産に入る前に、部品の納入から組立までの全ての工程を確認する為だ。

この日は勝会長、修社長も現場で見守る。全ての工程に一切の不備が無いのか、緊張して張りつくだ。東洋製作所からは手倉さんと検査員の岡田班長も出張してきている。

部品が揃うと、高山さんと冴木が現場に入った。一つ一つ手順を確認しながら、ゆっくり組み上げていく。周りには人だかりができていて、浅倉工業の中での注目度の高さを物語っていた。

海の目が見ても、冴木の組立作業は勘所を抑えたものだった。常に次の工程を意識しながら、それでいてさりげなく高山さんの安全にも配慮を欠かさない。

無事に三台とも組立が終わると、最後の塗装を赤尾が手掛けた。

岡田班長がペンライト片手に入念に検査を始める。みんなが固唾をのんで見守っている。強面の勝会長と高山さんも同様だ。

何だか不合格、と言いつらいような……。

海も結果を待った。

「合格です」岡田班長が告げると、歓声が沸き上がった。みんな

がほっとした表情をしている。無事完成されたピカピカの三台を見ると、今までの激務が形になったような気がして、海は心から嬉しかった。みんなで一つのモノを力を合わせて作り上げる製造業の、このお祭りのような感じが海は大好きだった。

「本多君と板垣、良くやった」修社長が声を上げる。板垣とアイコンタクトを交わす。板垣も笑顔だった。ただ、海には周りに何かを悟らせまいと無理をしている笑顔に見えた。

試作が終わると、また海と板垣の忙しさは加速した。試作時に洗い出された製造工程の改良点が出て来たのだ。一つの改良点を織り込むと、前後の工程に少なからず影響が出てくる。全体の整合性をとりながら少しでも安全で良い方法を、現場の負担が少なくなる方法を探し続けた。議論を交わしながらも、海は板垣の様子がいつもと違うことに気が付いていた。板垣はどこか上の空なのだ。

それでも組立ユニットの量産の日はそのままで来ていたし、ここで仕事の手を緩めるわけにはいかなかった。

「海さん、今、話できますか」板垣が思い詰めた表情で切り出してきた。時間は夜八時を少し回ったところだ。

「遂に来たか板垣、何があった」

「正門に竹中さんが来ています。一緒に話を聞いて欲しくて」

「分かった」

板垣と正門まで歩いていくと、竹中が待っていた。

軽く会釈した。

「こんな所呼び出してしまつてすみません。海さん、自分、来週からお休みをもらうつもりです。大切な時に申し訳ありません」

板垣は頭を下げて話を切り出した。

「スミマセン」竹中も頭を下げる。

「竹中さんと同棲を始めて半年になるんですが、この前、妊娠が分かりました」

「それはめでたいんじゃないのか」

「それが、先週、流産してしまいました」竹中が肩をすぼめながら掠れた声で答えた。長閑だがどこか勝気な竹中の面影はなかった。板垣がそっと竹中の肩を抱き寄せる。

「すまなかった。お前の様子がいつもと違うのは少し前から分かっていたのに、板垣」

とんでもない程の仕事量を板垣に押し付けていた後悔が襲ってきた。一人で、夜遅くまで板垣の帰りを待つ竹中の胸中を想像した。そして、そんな竹中を待たせて仕事をしなければならなかった板垣の心の内を思いやった。何故ひと言……たったひと言自分から声を掛けられなかったのだろうか。いつの間にか全てを仕事中心に考えていた自分に気がつかされて嫌になった。

「違うんです、自分は海さんに感謝しています。ただ、今は竹中さんのそばに居たくて」

「その通りだ。こっちは事は気にするな」

正門に植えられた真弓の木が薄緑色の小さな花を精一杯にひらかせている。

板垣は竹中の方に向き直って言った。

「竹中さん、結婚して下さい」

「はい。ありがとう昌樹。いつも急だね」

竹中が涙ぐむのが見えた。

板垣はそっと指輪を取り出して答えた。

「自分、今度は急じゃありません」

月が綺麗だった。

翌朝、出社してこない板垣の机を眺めていると、応接室に呼び出された。修社長は普段は海の机まで来て話をするので、周りに聞かれたくない話だと察した。

「本多君、君一人でできるか」

「とても難しいです。ただ、やるしかありません」

海は正直に話した。

「二人ではとてもやり切れないだろう。やるしかないなんていう精神論は聞きたくない」声を荒げるのを抑えられない修社長の重圧が目に見えるようだった。

「何故気が付かなかった。板垣の変化に気が付いて、早く家に帰してやるように配慮すれば、会社に来られなくなる、なんていう最悪な事態にはならなかったはずだ」

「返す言葉ありません。申し訳ないです」

「組立ユニットの量産が始まったら君も現場に入るんだな」

組立ユニットの量産導入に浅倉工業の社運を賭けているといっても良いのだ。修社長の怒りは暫く収まらないだろう。

そもそも海と板垣の激務を前提に成り立っていたのだ。板垣の不在は致命的だった。積み上げてきた努力が崩れ、海自身も自暴自棄な気持ちになっていくのを感じた。

修社長の声が応接室から漏れていたのだろう、応接室から出ると事務所の皆が心配そうな顔を向けてきた。

なんとなく事務所に居場所が無いような気がして、海は現場に向かった。

現場に行く途中、水を張った防火水槽に目が留まった。ふと、目を凝らすと水面には手のひらほどの大きさの赤い金魚が二匹泳いでいる。火事が起こったら水が抜けて金魚は生きていけない。今まで何度も往復した事務所と現場のちょうど間にある防火水槽だったが、金魚に気が付いたのは今日が初めてだった。

海にとって防火水槽はあくまで設備の一つだった。設備の中を泳ぐ生命を気にかけたことは無かった。

何か引つかかるものを感じた。

暫く眺めていると、防火水槽で泳ぐ金魚は、会社という枠の中で働く自分なのだと気が付いた。海は防火水槽の前から動くことができなかった。

「現場も悪ないぞ」

防火水槽の前で佇んでいると、遠くから高山さんが声を掛けてきた。修社長と話をしてきたのだろう。

「悩んだり、落ち込んでいる暇は無いで。体を動かせばお前の中の神様が働いてくれて、悪いものとか、迷いが全部出ていくから」

「そうですね。よくわかりませんが、ありがとうございます」

海が力の無い返事をする、高山さんは何も言わずに、馬鹿みたいに強い力で現場の方へ海の背中を押し始めた。

作業着を借りて現場に入った。海にとって現場作業は新入社員の時研修以来で、逆に新鮮だった。半日ほど作業をすると、小さな改善案を見つけた。腰痛を発症しそうな無理な作業姿勢があったのだ。やはり実際に作業してみると見えてくるものがある。海は改めて自分の仕事が現場にこそあると思った。

一日の作業を終えて建屋からだと、夕陽を浴びる雄大な白山が目に入ってきた。谷筋に白く残っている雪はもう消え入りそうなほど細い。体を動かし続けたからだろうか、事務所仕事では感じられない充実感があった。

現場作業の日々が二週間経過して、海の筋肉痛も二回りした。作業には慣れてきたが、とにかく忙しかった。毎朝八時から夜二十時迄、三時間の長残なのだ。高山さんも現場に入って、まさ

に総力戦になっている。

現場の雰囲気次第に硬くなっていくのを肌で感じた。部品の欠品や前工程の些細なミス、出荷前のトラブルで小さな口論があちこちで起こっていた。みんな忙しすぎて余裕が無くなっている。

事務所との不協和音もあった。現場が毎夜遅くまで残業している一方で、事務所の社員が早く退社しているのだ。海は現場と事務所をつなぐ役割である自分が、事務所に戻るべきだと感じ始めた。そんなタイミングで、高山さんから盛ちゃんに誘われた。

盛ちゃんに到着すると、大部屋を貸し切りでまさに浅倉工業の主要メンバーが軒並み揃っていた。全部で三十人ほどだろうか。「みんな今週もよく頑張ってくれた。今日はガス抜きもあるが、これからの体制についても発表する。まずは乾杯だ」

高山さんが音頭をとると、みんな一斉にコップを乾かした。せつかな修社長が早速立ち上がる。

「まず本多君、この前はすまなかった。事務所に戻ってくれ」

「はい。その方が良いと思っていました。ただ、現場に人員が一人足りなくなります」

「来週から板垣と竹中が復帰する。板垣を現場に入れる。本人も了解済みだ。リフレッシュという意味もある。あと一人、新たに採用も出来たから、これで現場の人員は一人プラスだ」

冴木と赤尾が板垣の復帰のニュースを聞いて嬉しそうに顔を見合わせている。

修社長が一呼吸溜めて話を再開する。

「赤尾、君は事務所でも本多君と一緒に仕事をしてくれないか。高山さんからの推薦だ」

油断していた赤尾がビールをこぼした。

「社長、俺高卒ですし事務所の仕事はできませんよ。普段、野球のカウンタくらいでしか数字使っていませんし」

「お前には緻密にモノを見る目がある。エンジンアになつてみんか？」高山さんが言う。

「そんな……」赤尾は畳に目を落とす。

「いいんじゃないですか。俺は賛成です。赤尾ならできますよ」
冴木が背中を押す。

「俺、塗装の仕事が好きなんですよ。塗装すると何でも綺麗にできるから」

ここまで言つて赤尾は顔を上げて周りを見渡した。

浅倉工業の三十人がみんな赤尾を見つめている。赤尾もみんなの顔を一回り見渡す。

一瞬だけ盛ちゃんのざわめきが静まった。

「分かりました、社長。事務所に行きます。ただ、一つお願いしていいですか？」

「なんだ？」

「社長、野球部に入ってください。高校最後の試合で打てなかった事でグローブを置いたと聞いています。でも、大学野球からも推薦があったほどの選手だったとも聞いています。野球部に入ってもらえませんか」

浅倉工業の三十人が今度は修社長を見つめる。また盛ちゃんが静まり返る。

「いいだろう。決まりだ」

「よし、もう一度乾杯だ！」

高山さんが間髪を容れずに発声して、ビールを煽る。

浅倉工業と盛ちゃんの夜が更けていった。

一か月後……

「代打、浅倉修」八回裏、遂に修社長がバッターボックスに立った。

小松地区予選の初戦、対戦相手は灰山建設野球部だ。スコアは既に四点リードしている。それでもみんなが修社長の打席を楽し

みにしているのが伝わってくる。高山さんも冴木も赤尾も、板垣も竹中も、修社長がこの一か月で手の豆が潰れるほど素振りをやりこんでいた事を知っている。

ヘルメットが初夏の強い陽射しを反射する。修社長がヒッティングポジションを取った。

初球を空振りしたが、綺麗なフォームだった。みんなの期待が高まる。組立ユニットの量産化を成し遂げた浅倉工業の更なる飛躍への祈りがバットに乗っかっている。

二球目。

痛烈な打球が三遊間を突き抜けた。

「社長、ヒットも契約も取って凄いな〜！」

高山さんが茶化すと、みんなの笑顔が広がった。

